

第26歩「5月の紫陽花」

観測史上最も早い梅雨入りだそうです。去る5月15日に四国地方が梅雨入りしたと発表されました。平年と比べると、21日も早いということで、新緑が眩しい陽春を楽しむ間もなく、梅雨と夏が突然一カ月前倒しでやってきた感じです。地球温暖化による気候変動を実感しています。

季節の植物、花にも変化が見られます。この原稿を書いているのは5月下旬。まだ6月になっていないのに、路地裏の紫陽花が早くもいくつか花を咲かせています。紫陽花と言えば雨に似合う6月の花という印象が染みついています。最近では母の日に紫陽花を送る方も多いそうで、咲いた月にこだわる必要はないのかもしれませんが、「5月の紫陽花」と聞くと、どうしても違和感を覚えます。

そういえば、今年は、春先のぼかぼか陽気に誘われて高松市での桜（ソメイヨシノ）の開花も統計開始以降最も早い、3月15日でした。平年に比べて13日も早かったとのこと。陽気のせい、いつもより鮮やかな花を咲かせていたように思える今年の桜でしたが、コロナ禍の渦中の為、花見の宴は控えられ、昨年に引き続き十分にその可憐な花を楽しむ事ができなかったのは残念でした。

そして、それから2か月経過しての5月の半ばの梅雨入りと下旬の紫陽花の開花です。いつもなら静かに移ろいゆく日本の四季の情緒がコロナ禍を早くくぐり抜きたいが如く、息をきらして駆け足で通り過ぎようとしているように感じます。

雨にぬれて鮮やかな色彩のグラデーションを見せる紫陽花ですが、よく知られる花言葉は、「移り気」、「冷酷」というもの。あまり良いイメージではありません。しかし、早咲きの今年の紫陽花はいつものものとは違うはず。そうであれば、温かみのある花言葉である「団らん」や「和気あいあい」、「家族」を当てはめたいと思います。コロナ禍で、人と人とのつながりに大きな制約がある今だからこそ、紫陽花の花に癒されたいと思うのです。

